

北原 武夫

KAWADE'S
E.E.E.
PAPER BACKS

愛の檻



河出書房

北原武夫

河出書房



Kawade Paperbacks 82

愛の檻

表紙構成 原 弘 (NDC)

昭和 39 年 1 月 15 日 初版印刷

昭和 39 年 1 月 20 日 初版発行

定価 280 円



著 者 きた はら たけ お
北 原 武 夫

発 行 者 河 出 孝 雄

印 刷 者 堀 内 文 治 郎

©1964

発行所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町3の8

電話 東京 (291) 3721~7

振替口座 (東京) 10802番

印刷・堀内印刷所

落丁本・乱丁本はお取り替えます

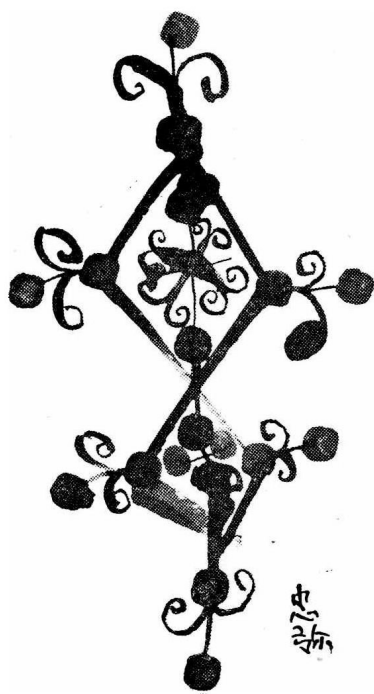
目次

姦通	三
愛の檻	七七
野性	一〇三
或るドン・ファンの告白	一三
聖靈のいない夜	一九
コキエ物語	一五
プレイ・ボーイ	二三
あとがき	二五

愛
の
檻

茲

通



忠
心

「どう、すぐお風呂に入る？」

鉄の柵が半開きになったままの、共通の門を入ると、自分の部屋の方への階段を上りかけながら、蘭子が訊いた。

「そうね……」

「丁度、空いてるわよ。今だったら一緒に入れるわ」

信濃町駅に近い、四谷左門町のこの中級アパートには、部屋つきのバスがなく、その代り、二棟のアパートの真ン中にある管理人の家の浴室が、ささやかな中庭に面して、独立してつくられていて、夜八時から夜半の二時頃までは、居住人の誰でも自由に入れるようになっていた。蔓薔薇つるばらなどをからませた、庭囲いの垣根越しに、入口のドアがびったり閉められ、その明り取りに灯が消えているのは、丁度今、誰も入っていないという証拠だ。

「ねえ、どうするの？」

「そうね、どうしようかしら……」

せつかちな蘭子に、癪^{かん}の強い声でそう催促^{さいそく}されると、入りたい気はあるのだけれど、景子は何だか、却って急に返事ができなくなった。それに、誰にもいえない自分だけの理由で、同性のこの蘭子に、自分の裸身を見せたくない気持もある。

小さい時からの妙な潔癖^{けつぺき}と、羞かしがりやの癖が、この頃は一層強くなったと思ったが、仕方なかった。遠慮がちに、やっと景子は言った。

「入ることは入るけど、あの人の都合を訊いてからにするわ。とにかく、あなた、先に入ってよ」

「変な人ね、折角お風呂の中で、ゆっくり話をしようと思ってたのに。じゃ、いいわ」

ハイヒールの音を立てて、階段を上りかけて、急いで顔だけを景子の方に振り向けると、蘭子は、もうすっかり機嫌を損じた声で、しかし押しつけるように、念を押すのを忘れなかった。「でも、あの話は、よく考えててよ？ あたし、あんたのためを思って取次いだんだから。いいわね？」

トットと階段を上ってゆく、いかにも癪^{かん}の強そうなその靴音は、景子が別棟の入口まで来る間に、もう消えていた。午前一時で、もうこんな夜更けなのに、あんな大きな靴音を立てて、ほかの部屋の人に迷惑じゃないのかしらと、そんなことを考えながら、景子は、その階段をそっと上っていった。

自分の部屋の、しまったドアの前に来ると、今夜は特に、自分の気持が重く沈んでいるのが、景子にはよく分った。が、そう気がつくと一緒に、景子は急いでドアを開けた。ドアを開けるのに、少しでもためらいを見せたりすると、そんな気配にはひどく敏感で、すぐ気を廻したがる信也に、不必要な疑いを起させるのが景子は怖かったからだ。

トイレと並んだ、人口の土間のところで靴を始末し、キッチンのついた四畳半を急いで通り抜けて、二人の寝室兼彼の書斎になっている、次の六畳の襖を開けると、想像した通り、信也は、華奢な脚をスラリとのばし、スエーター一枚の両腕を頭の下に組んで、覆いのかかったままのベッドの上に、長々と横になっていた。

フロア・スタンドの灯明りを、丁度いい具合に浴びた、電気炬燵をかねた坐卓の上には、原稿用紙が散乱し、その卓上の灰皿には、一ト晩じゅう始末しなかったらしい煙草の吸殻が、ギッシリと詰まっている。

「どう？ 今日はいくらか書けて？」

三面鏡の前に腰を下ろしながら、景子は急いでそう訊いた。その自分の声が、腫れものに触るようにオズオズしているのと、口ではなるべく優しさをこめようとしていながら、顔の方は、なるべく彼の方を見ないようにしているのに、自分でもすぐに気がついたが、どうしようもなかった。

「難かしいところは、もう通り越したんでしょう？　そうじゃなかったの？」

信也は、答えない。答の代りに、さも疲れたように、ふウツと大きな吐息を口から洩らして、眼を天井にやったままだ。

「大変ね、ものを書くって。ほんとに同情するわ」

何とか上手に、舐りの言葉をかけたいと思いながら、どうしても適当な言葉が口から出て来ないので、スーツのボタンを外す手を止めて、景子は思い切って、信也の方に顔を向けた。

「どうなさるの？　もう少しお仕事をつづけるおつもりなら、わたし、ここで着替えただけして、すぐお風呂にゆくわ。丁度蘭子さんも、一緒に入ろうといって待ってるし。その方が、あなたのお邪魔にならなくて、却っていいでしょう？　どう？」

「却っていいでしょう、か。やっぱり、言うことがお上品だね。僕を邪魔にしてるのは、君の方じゃないのかい」

寝たままの恰好で、不意に信也がそう言った。ふんと、子供っぽく鼻を鳴らしながら。もう三十四歳になるのだが、苛立ったり、不機嫌になったりすると、言葉つきやしぐさが、ふだんよりも一層子供っぽくなるのが、この信也の癖なのだ。

そんなことは、もう身に沁みて知っていたが、そんな言葉を聞くと、景子はやっぱり、何かで心が刺された。景子の声音には、思わず、心のうちの寂しさが出てしまった。

「いやアね、そんな言い方だけはしないでよ。悪かったら謝^{あやま}るわ。わたしも疲れてたんで、きつと変な言い方をしたんでしょうけど……」

「いや、ちっとも、変な言い方なんかしてないよ、君は」

甘えているのかと思うくらい、変にねっとり絡^{から}みつく彼の声が、すぐ返って来た。

「いつも言うことが控え目で、自分を殺していて、そのくせ愛情がたっぷりしていて、全く君ほど、立派な人はないよ。その上、顔も身体も、そんなに魅力的^{シャルマ}なんだからね。そんな素敵な人が、どうして僕なんかのところに来たのかと思って、仕事をするよりも、僕は今日一日、ずっとそのことを考えてたんだ。ほんとだよ、君！」

水よりももっと冷たいものが、スッと背筋を走るのを覚えて、景子がまた顔を伏せて、じつと身体を固くしていると、急に苛^{いら}立って言いつのる彼の声が、つづいてすぐ、彼女の耳を打った。

「おまけに君は、僕にとって大きな財源だし、それだけで充分なのに、その上僕のために、毎日そうやって君は働いているんだものね。それも、君のような人には、誰が見たって似合わないような、バアのホステスなんかをしてね！ これで僕が、のうのうと仕事なんかしていられたら、どうかしてるよ。君はそう思わないかい？ ……僕が今、こんなに一生懸命頑張ってるのに、ちっとも書けないのは、僕には今その罰^{ばち}が当たってるからなんだ。そんなことぐらい、僕

はチャンと知ってるんだ……」

その言葉の最後の方が、はげしい顫えを帯びて、急にカスれたのを知って、景子がハッとして眼を上げると、信也は、驚いたことに、先刻と同じく長々と脚をのぼし、両手を頭の下に組んだその恰好のまま、固く閉じたその眼から頬の上に、大粒の涙をポロポロと滴ら^{した}せていた。

色白で、華奢で、ひ弱なくらいほっそりした顔立ちなので、平生でもせいぜい景子と同一年の、二十八歳ぐらいにしか見えない彼は、明るい灯明りの下で、そうやって眼を閉じていると、棘^{とげ}のような密生した睫毛^{まつげ}の影が、端正な頬の線を一層弱々しく見せているので、殆んど少年のようにしか見えない。その睫毛を、そこからあふれ出て来るたんびに、いちいち内側から盛り上げるようにして、芝居とはどうしても信じられない、大粒の涙が、ポロポロとこぼれ落ちていくのだ。

彼の泣き方があまり大袈裟なので、景子はそのたんびに、本気で泣いているのか、それとも芝居で泣いているのかと、いつも思わせられるのだが、そんな疑いが起ることと、真正正銘の涙を目の前で見せられる気持とは、また別だった。景子はハッとなると、急いでベッドに歩み寄り、そこに跪^{ひざまず}いて、いつ取り出したのか自分でも覚えていない、片手のハンカチで、子供にでもしてやるように、あとからあとからつづく、その涙を拭^ぬっていた。

「お願いよ、あなた。そんなことだけは言わないで！ わたし、言い方が下手なのでいけない

「んだけど、わたしの気持、あなたにはよくお分りじゃなくって？」

「うん、分ってるよ、景子。分らない筈があるもんか」

すっかり涙がおさまったあとで、鼻を鳴らすように、信也がやっと言った。何処となく、まだダダをこねているような語調だった。

「分ってるからこそ、あんなこと言いたくなるんだよ。みんな僕がいけないんだ。僕という男は、どう考えても、君にふさわしくない人間じゃないかと、一度そんなふうに思われて来ると、もうどうしていいか分からなくなっちゃって……」

「またそんなことおっしゃるの？ もう厭よ、そんなこと……」

「いや、ご免。もう言わない、もう言わないよ、景子。その代り、……その代り、もっとしつかり、そこで僕を抱いて！」

景子が抱きしめるよりも早く、下からスエーターの両腕をのばして、信也が、狂おしいほど強く、景子を抱きしめて来た。彼の接吻は、例によって巧みで、ほんの一、二分もしないうち、頭の芯まで景子はしびれたようになった。そして数分ののちには、いつの間にかスリッパ一枚にさせられた景子は、華奢ながら筋肉質で遅^{たくま}しい、彼の半裸の身体の上で、つづけさまの陶醉で、四肢の先まで生^{なまぬる}温^{とろ}く溶けたような身体を、ただぐったりさせていた。

その耳許で、甘い声音で囁く彼の言葉が、ぼんやりと聞えた。

「ね、いい？ 君の身体を、こんなに美味しいものにしたのは、僕の力だからね、僕はもうどんなことがあっても、一生君を離さないよ。いいかい、景子？……」

景子は、夢の中にいるように、半ばうつつに頷いた。彼女の好みからは遠い、露骨な言葉だったが、こんな最中にそんな言葉を聞くと、弱い女の一人の景子には、やはり嫌悪よりも嬉しさの方が強かった。景子は、手探るように手を伸ばして、自分の方からも、ひしと彼の身体を抱きしめた。……

2

晩春からいきなり夏に入ったようによく晴れた、その数日後の日曜日の昼過ぎ、ナプキンからシートから、薄いスエーターまで、電気洗濯機で一気に洗濯したのを、景子が、二つの窓いっぱい乾していると、ノックもしないで、いきなり蘭子が部屋に入ってきた。

「あんたって、世話女房なのね。こんな素敵なお天気の日に、よく働く気になるわね」

蘭子は、季節にしては早過ぎる、純白のスーツをびっちり着て、濃い臙脂えんじのマフラアを、しゃれた形で頸くびのところに捲ひいている。肉づきが少し足りないが、背がスラリとして、外人のように身体の線の美しい蘭子には、それがよく似合っていた。

「それに彼氏は、温泉なんかについて、留守なんでしょう？ あたしだったら、こんな時は

一層のうのうとして、何にもしないでいるのにな」

勝手にベッドのところに腰かけて、煙草に火をつけていた蘭子は、彼氏などという言い方の嫌いな景子が、それには一ト言も返事をしないのを見ると、すぐに言い直した。

「ねえ、今日あたし、これから榊原^{さかきばら}さんに会うのよ。ロードショウを何か見て、それから食事をして、あとは何処かのナイト・クラブにゆくという、例によって退屈なお膳立てだけど、それもあんたがすっぱかしたお蔭よ。ねえ、今日はあの人に、何て返事したらいいの？」

「あなたのいいように言っててよ。わたしには別に返事なんかないわ」

「乙に澄ましてるわね、と言いたいとこだけど、あんたには、そんな言い方が変に似合ってるから頼^{しやく}だわ。やっぱり育ちの違いかな」

冷かすような、機嫌を取るような口調で、そんなことを言いながら、景子が三面鏡の前に坐って、クリームで顔を拭き出すのを、蘭子はしばらく黙って見ていたが、急に言い方を変えた。

「ねえ、あんた、ほんとにあの人が嫌いななの？」

「嫌いじゃないわ。でも、あの方の言ってるような気持には、わたしどうしてもなれないの」

「そうかな？　でも、お金があって、紳士で、女に優しい上に、女の扱い方が巧くって、うちのお店に来るお客さんの中でも、あの人だったら、先ず一流中の一流じゃない？　それに、中年過ぎにしては、相当の男前だし」